
13番目と666番目な死にたがりのニートで勇者な魔王

× ×

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

1-3番田と666番田な死にたがりの一ートで勇者な魔王

【著者名】

N1337P

×
×

【あらすじ】

吾輩は異世界から召喚された勇者であり、魔王であった・・・もちろん過去形。今はただの一ートです。元の世界に帰れてないけど

ん?僕?

いつもいつもニタニタ貴方の後ろに責め寄る变态、コホン失礼噛みまみた。うん?

ちなみにこのお話の内容は、昔々あるといい（長いから以下省略）
とさお終い。

とまあかくがくしかじかでこんな感じに僕がまだ花開いてない12歳ぐらいの女の子たちでハーレムを作るお話です。別にもう一回呼び出されたりとかしないんだからね！ヒヤッホ死にてえ

■ まわらのロローグ（前書き）

どうも ×× です。この小説は息抜きに書いた駄文なので続くかは決まっておりません。それを理解したうえでお読みいただければ幸いです。

なお一次製作は初めて書いたので、手探りで書いております。ぶつちやけ面白いか自分で判断できん

もし面白いと感じて続きを読むとお思いになつた方は言つていただきれば幸いです。ではおたのしみください

眞す死のアロローグ

「一ート王に、俺は、なる！…！」

なんて高らかに宣言しても既に一ートなわけだが

人の“死”には意味がある。

僕はこの言葉はあまり好きじゃない。といつかハッキリ言えば嫌いである。

例えば虐げられ自殺した少年の遺族に得意満面な顔で『お子さんの死によりイジメの取り締まりが厳しくなり、イジメ被害者の自殺が少くなりました。貴方のお子さんの死には意味があつた』などと言われた日にはその学校に行って火を点けるのは遺族として正しい心がけであろう。

だからと言ってこの行動を奨めているわけではないので悪しからず。

とにもかくにも“死”に意味などはない。

死とは究極的に言って終焉であり、端的に言って終わりである。生

きていく限り無慈悲に無意味に無関係に無機質に無意識に無邪氣に無条件に無作為に無頓着に無分別に無造作に無責任に・・・・・そして何より無差別に誰よりも何よりも平等に訪れる。それが“死”だ。

隣のおばちゃんから家族、親類、友人、嫌いな相手まで全てにおいて平等に訪れる。

だからこそ“死”に意味などない。

終わりとはそのままの意味で終わりなのである。

『死人に口無し』

この言葉が言うように死んだ人に出来ることなどないのだ。

しかしそれは死者を蔑ろにしていいという意味ではない。むしろ平等に訪れるからこそ、“死”は何よりも尊い。この世界に“死”より平等なものはないのだから故に死人を悼み、その“死”を悲しむのである。

“死”は貧富の差や才能の優劣などに関わらず、一瞬で全てを根こそぎ奪い去る。

それこそが“死”だ。

だから人は一瞬の刹那の中で幸せを見つけて生きていいくべきなの
だ！！

で僕が何を言いたいかと言ひと簡単な話・・・・家出をする
しかないわけだ。

んつ？話しが繋がらないぞと思つたそこの君！

よく考えてみてくれ、いずれ人には必ず死が訪れると言うならば
つまでも自らが不幸な目にあう場所にいようと思う人間がいるだろ
うか？少し性癖の素敵な被虐主義者、簡単に言えばドMさんならそ
の素敵な空間にいようと思えるだろうが残念なことに僕は微Sであ
る。

ドSとまでは行かないものの加虐主義者なので自分が痛みを負う
ことは大嫌いだ、まあヘタレなので喧嘩とかも嫌いだが・・・・
とにかくそんな素敵空間で過ごすわけにはいかないので、家出をす
るしかないわけだ。言ひなれば若氣の至りEN17歳の夏、多感な
この時期こそ青春を手指さなければならぬのだ。

前々から家出しよう、家出しようとは思つていたので口煩いとい
うかウザつたいお隣りさんという名前の邪魔者（7歳・小学生女子：
僕をパシリか何かと勘違いしている。よくカツアゲされます）がい
ない今がチャンスであろう。

では何故僕が家出をしたいかと云うと話は10年前に遡る。当

時7歳だった僕は茹だるような暑い夏を乗り切るために当時友達であつた大竹くんと一緒にコンビニでアイスを買いあさり、アイスキンデイーを箱買いしていた。

遊 王カードを買うために今まで貯めていたお金を全てアイスに注ぎ込んでしまう程、その年の夏の暑さは異常だったのである。

計36本のアイスを食べ尽くした僕と大竹くんは案の定腹を下してコンビニに駆け込んだが、当然コンビニにトイレは一つしかなく同時に一人で走りだし競争とあいなった。

そして走っている最中にたまたま、たまたま、たまたま（大事なことなので何回も言う、偶然って怖いよね）転びそうになつて大竹くんの背中に蹴りをいれようとした瞬間、大竹くんはニヤリと口を歪めてまるで僕の行動を読んでいたかの如く笑いながら僕の腹部に軽快な蹴りを食らわせて、ダメージによりコンニチハしかけている“アレ”を封印するために肛門活躍筋に入れている僕を蹴落として高笑いしながら自分だけコンビニのトイレへと駆け込んだのである。

大竹くんの人間性の低さというか器の小ささに絶望した僕は脳内に繰り返し流れる大竹くんの高笑いを思い出しながら大竹くんの自転車を近くのドブ川に捨てた後、遂に限界が来たので考えていた嫌がらせを実行に移すのをやめ自分の自転車に乗り込み急いで自宅へと向かった。

自転車に乗っている間、発生する揺れに耐えながらもようやくついた安住の我が家に駆け込み、戦闘体勢をとるために玄関に入ると

同時に家の一番奥にあるトイレへと向かいながら煩わしいと言わんばかりに衣服を脱ぎ捨て始める。

そして戦闘体勢よろしく全裸へとなつた僕（裸の方が踏ん張りやすいと感じるのは僕だけだろうか？）はトイレに入り込み、戦闘を開始して無事に間に合い戦いを終えたのである。

戦いを終え、全力で自転車をこいだせいで出来た額の汗を拭いさりながらも、トイレの外にある水道で手を洗おうと思いつトイレから出るためにノブに手をかけて扉を開けると・・・・・

「・・・はっ？」

扉の先には広大な草原が広がっていた。
どうやら疲れたせいで目が腐つたらしい。

思わず声が出てしまつたがとりあえず一度扉を閉めて、自分前に広がつた光景と自分の脳みそを否定しながら便座の上へと再び着席した。

「そつか高密度の重力により発生した重力レンズつまりは - 光が曲がることは一般相対性理論から導かれる現象で、一般相対性理論の正当性を証明した現象のひとつである。光は重力にひきつけられて曲がるわけではなく、重い物体によつてゆがめられた時空を進むた

めに曲がる。対象物と観測者の間に大きい重力源があると、この現象により光が曲がり、観測者に複数の経路を通った光が到達することがある。これにより、同一の対象物が複数の像となつて見える。光が曲がる状態が光学レンズによる光の屈折と似ているため重力レンズと言われる・これが次元に干渉し、本来あるべき光景を歪めたのか、11次元干渉

「

当時夢のない少年だった僕は受け入れ難い現実を拒否しつつ無理矢理S.F（少し不思議）のせいにしながらも便座から立ち上がり、混乱する意識を落ち着かせ深呼吸しながら再び扉を開くと

「「えつ？」」

何故か驚きの声が重なつた。

扉の先にあつたのは石畳のあるゲームによくある神殿のような場所で、目の前には鮮やかな長い銀髪の髪を持つた紅い目をした少女が祈るように手を組みながら前屈みになつて正座しており、その少女がふと顔をあげて・・・・・

「いつ・・・・・・」

顔をあげた前屈みで正座している少女の顔の高さとマイリトルサンシャインの高さはイコールなわけで・・・・・・

「一ギツ!?」

まだこの時には可愛らしかつた僕の相棒は女性の放つたどうしうもなく綺麗で重い正拳突きにより潰され、有り得ない痛みが股間を駆け巡る。

女性には分からない痛みで悶え狂いながらもトイレまで吹き飛ばされ、痛みに耐え切れずトイレの中で気絶してしまった。

しかし吹き飛ばされた際にすれ違ひ様に全ての恨みを籠めて少女の胸板を人差し指で突き、少女の成長があの状態で止まりエターナルツルペタロリータと呼ばれロリコンからアイドルにされるよう呪つた。

まあもちろん北斗 拳とか非科学的なことは出来ないので精一杯の抵抗という名前の嫌がらせではあつたが・・・・・

そして、気絶した僕を起こしたのは僕のオカンだった。トイレにおいて全裸で気絶している僕を発見したオカンは耐えてはいるものの隠し切れぬ笑みを浮かべながら、僕がどのような様で気絶していたのかを明確に伝えてくれ

少女に吹き飛ばされた際に鼻をぶつけたらしく、発見時には鼻血が噴出していたそうだ。

母曰く、当時の携帯にカメラ機能がないことが大変悔やまれたとのこと・・・うん、死ねばいいのに。
むしろ僕が死ぬから放つておいてください。

言い訳しようにもトイレが変なところに繋がって、その先にいた少し年上ぐらいの1~2歳らしき女の子にマイサンを殴られたZEなどと言つても精々憐れみを籠めた目で見られるか、黄色の救急車を呼ぶて頭の中がお花畠な人がたくさんいる病院に連れていかれるのは目に見えていたので何も言わずやり過ごすしかなかつた。

しかし、僕の不幸はこれだけで終わるわけもなく、最悪なことにウチの母親は明石家さ まを越えるおしゃべりだつたのだ。

母親にとって僕のこの事件は格好の話のタネであり、マシンガントークを越えたガトリングトークを操る母親にとって町内など在つてなきにも等しいせまい空間だった・・・簡単に言えば町内全域に

僕の醜態が伝わっていたのである。

事態に気づいた僕はすぐさま自殺を敢行しようとしたが、お隣りの、娘であるクソガキの育て方を間違えたクソガキの母親であるオバサンに阻まれロープでグルグル巻きにされ我が家玄関に吊された。

無論さらにも醜態を増やした僕はついに悪い風邪にかかつたかのごとく性格をこじらせ、人間不信となりましたとさ・・・・・おしまい

まあ冗談は一度おいておいて話を続けるが・・・僕の醜態はこの程度で終わりなどではない。

この後母親によりバイオハザードのごとく町内に伝わった噂は隣町にまで伝わり、手始めと言わんばかり嫌がらせを受けはじめ小学校でのあだ名はトイレマン。

小学校を卒業後、中学で心機一転やり直そうと隣町の学校に通えば、母親のせいで噂は既に伝わっており中学でのあだ名は便所カイザー・・・・・簡単に死を覚悟出来るあだ名だった。

ひつしてすぐに僕は自分の殻へと閉じこもる内向的な性格の青年へとスライドレビューションしたのである。

で今現在、地元の中学校から私立の高校へと行きなんら楽しみのない平凡な生活を送っている。まあ便所力イザーなどと呼ばれないだけ幾分かはマシだが、内向的な性格をすぐに戻すことなど出来るはずもなく、友達は指で数えられる程度しかいない現代社会が生み出した哀れな青年Aへと成り果てたわけですよ。

Hahahaha

虚ろな目で軽く笑いながらも用意してあつた鞄を取り、自室を出て玄関へと向かう。

すぐに出るか迷つたがとりあえず嫌がらせに冷蔵庫の中身を喰い漁ることにしたので冷蔵庫の中を漁つていると・・・・・

ピンポーン

インターホンが来客を告げてきた。いつもは自宅警備員の役を果たす気もなく、来訪者は全て無視していたのだが家出前で少し上機嫌になつていた僕は躊躇わずに玄関へと行き、扉を開けた。

ガチャ

そこには・・・・・

「やつはんにちわ」

バタン

力チャ

力チャ

「ふう」

世界で一番関わりたくない奴がお洒落な格好をしてここやかに立つていた。

嫌悪のあまり瞬時に鍵とチョーンロックまでかけた僕は間違いないかじやない。

自分自身にせつ言い聞かせながらも先程からロッキーのテーマソングみたいに鳴っている（インターほんの連打で再現されている・・・・・器用なことを）インターほんを無視する。

待て落ち着くんだ僕！ただ単に僕が奴を毛嫌いしているだけで奴と僕に直接的な関わりはなかつたはずだ！つまり奴が訪ねてくるなんてことはなく先ほどの奴は幻覚であり、10年前と同じようなS-F（少し不思議）体験をしているだけだ。だから落ち着くんだ僕！下駄箱から靴を取り出して窓から出ようとするなんて行儀の悪いことをしちゃ駄目だ！

受け入れがたい幻覚のせいで多少混乱してしまつたせいか、体が勝手に動き玄関とは反対に設置された窓へと向かう。カーテンを開き曇りガラスの窓の鍵を外し窓を開くと・・・

「こんにちわ」

パン

力チャ

何故か窓の前に奴が立っていた。何だらうこのお約束のような嫌がらせは・・・やはり重力レンズか・・・少しだけ現実逃避しつつも受け入れるために目頭を揉み思考を整理しながらしがくなく玄関へと戻り、死んだ魚のような目をして嫌々ながらも玄関の鍵を外し扉を開く

「ヤアコソニチハイイ天氣デスネ」

「曇天がいい天気だなんて君は随分変わつているね」

やはりいたので棒読みで挨拶をしたのだが、返ってきたのが嫌味だつたので躊躇わざに扉をしようとしたらビックリのセールスマントラしく扉が閉まらないよつ足を入れてきた。まるでGさんのようなしぶとさである。

「さあて何故私が来たか分かる?」

「ハハハと楽しそうに質問投げかけてきたので心底嫌そうな顔をしながら

「知るかクソッタレ（いや分からなーいな）」

「ああうん間違いなく本音と建前が逆になつてゐるよ。」

「すまんあまりの嫌悪感で口が滑った」

「やうなの？私は君のことを愛しているのこつれないね」

「はう「冗談言う前というか僕の目の前に現れる前にドブ川で大竹く
んの自転車でも探してこい。まだ見つかってないらしいからな」

探したまま一生帰つてくれるな！

初対面にも関わらず嫌悪感を剥き出しのまま眉をしかめぞんざい
な口調で奴と接する。しかし奴は氣にもとめずくに会話の最中に身体
をねじ込み玄関へと侵入してきた。

「むう、綺麗で可愛い女の子が田の前にいるのに口説いじつさせずだ
んざいに扱うなんて君はゲイなの？」

「悪いな異性以前に貴様は僕のストライクゾーンじゃない。14歳
以上の年増に興味はないんだ」

「今全世界の女性の8割を敵に回したね。といつか君はロリコンだ
ったのね」

「何を言つロリータなんて失礼なことを言つたな！！彼女たちは一人

前のレディーだぞ！！それを女性として扱つて何が悪いんだつ！！

女の子が好きで何がいけないというのだ！！僕のこのままだしる
パッシュンを受け止めてみるがいい！！

「訂正しよう君は真性のペド野郎ね、ウチの妹に近づかないで欲し
いよ」

「ああ妹？貴様の妹など知らんし会つたこともないぞ？」

「ん？いつも遊んでもらつてこると黙つていたんだけど・・・」

「あん？年下のガキとなんか遊んだ記憶は・・・あるな・・・ああ・・・
いやまさか・・・なあ、それはさすがに・・・」

微妙な心当たりが出てきたので複雑そつに顔を垂めていると向を
勘違いしたのか

「ちなみに妹の名前は美夜だよ」

名前を伝えてきたのだが・・・・・・

ハイ、ビンゴ！隣のクソガキでした！！というか遊んでるじゃなくて遊ばれてんだよ！だいたいあんな外道とイチャイチャしたいなどとは微塵も思わん！！確かに見た目は可愛らしいが中身はそちら辺のチンピリと大差ないぞ？

僕は同世代のガキと喧嘩する際に足を踏み付けて逃げられないようにしてからフルボッコにする陰険な少女を貴様の妹で初めて認識したからな。その上、当たり屋の如くぶつかつてきては何かを奢らせようとしてくるし、悪ガキどもを率いては公園をたむろって人々（主に僕）を蹂躪するし、奴を外道と言わずには言つのだ

奴の口から告げられた妹の名前が見事に大当たりだったので、思わず今までされてきたことを思い出し沈み込む

ああ死にたい

・・・・・アレ？待てよ、コイツがクソガキの姉なら・・・・・
もしかして「コイツ今まで隣に住んでた？」

「隣同士なのに初めて君の家に来たけどわりと綺麗ね。幼馴染みとしては誇らしいかな」

奴が玄関から首を伸ばして中を眺めてくる。これ以上我が家を侵食されてなるものか！！そう思い家に上げないよう身体でプロックし続け、玄関に留まらせる。だいたい掃除してるのオカンだし、貴様が誇らしい意味が分からぬ。

それにしても・・・・じーさす。なんてことをしてくれたんだ
神様
クソッタレ

死にたくなる

こんな奴が幼馴染みだとでも言つのか！？

クソッ！17年間気づかない僕も僕だが、全く遭遇しなかつたって言つのが有り得ないだろ！？笑えるぜ、ギャルゲーのつもりかいがどこぞの神様も言つていたが・・・幼馴染みの条件とはTOYOTAなんだよ！！

TOYOTAが作る信頼の幼なじみ！！

「まずT!!」

「隣に住んでるのは大前提！！基本中の基本！！！」

「O---」

「お兄ちゃん（弟）以上恋人未満での長期関係！！！」

「Y---」

「「約束」はエントレイングへの隠し味……」

「よく聞け！」」から大事なんだ……」

「〇……」

「思い出の中ですべてを忘れたことに……」

「TA……」

「立場が全然変わつて再会……」

「これが幼なじみだ……貴様のような沸いて出たような今まで存在すら知らなかつたサブキャラ以下の奴を幼馴染みとは言わんのだ！理解したらさつさと去るがいい……」

「…………頭の中で言つたつもりかもしけないけど途中から全部口に出てたよ？」

しまつた！！つい熱くなつて…………痛タタタタタッ！？

「そつか私は幼馴染みじやなかつたのか…………といつか私が隣に住んでたの知らなかつたんだね」

「鈴木さんー？指が食い込んでますよー？指が僕のブレインを絞めつけてますよー！？」

ギリギリと音を立てながら圧死せんばかりに力が籠められていく奴の右手。アイアンクロ-必死にタップしたが無視されてー〇？も身長差があるにもかかわらず吊るされることテンミニーッ。凹んだじゃないかと思うほど痛みの走る頭を擦りながら奴へと向き直り向をしにきたのかを尋ねる。

「で、結局貴様は何をしにきたんだ？」

そんな僕の問いかけに対して、奴は二三二三しながら

「デートにいかない？」

「はつ断ー・・・痛つたたたたたたたた。『冗談ツすよーー逝きますー逝く逝くー！超樂しみ！』

「なんだそんなに私とデートが出来て嬉しいんだ」

あまりにもアホな意見を内心鼻で笑いつつ頭が沸いたんじゃないかと馬鹿にしながら即答しようとしたのだが、ボディーランゲージにより主張を歪曲させられ、地獄への旅路を強制させられた。溢れんばかりの不満を心内に抱えながらも笑顔を浮かべておく。今は奴の機嫌を取つておいて油断した隙に逃げるしかないな。100通りもの逃げ方を考えるもその中に立ち向かうといつ選択肢のないヘタな僕。

「じゃあ行こうか」

奴は僕が逃げることを予想しているのか分からぬが何故か僕にチキンウイングアームロックをかけて、そのまま外へと連れ出そうとする。僕の必死の抵抗もなんら気にせずに奴が玄関の扉を開けて僕の腕を固めたまま引っ張るように外へと出た瞬間、僕は懐かしい浮上感に見舞われて・・・

「ようこそ、いらっしゃいませ。12番目のです。あら?一人?これもアンペラトリス様のお導きでしょう。ようこそテニス王国へ。
12番目と13番目の二人の勇者様」

見覚えのある田の前には鮮やかな長い銀髪の髪を持つた紅い目をした巫女らしき女の子が目の前に現れて、見覚えのあるトラウマ満載なゲームに出てきそうな神殿らしき場所へと飛ばされた。

女の子の周りにいるのは明らかに銃刀法違反な剣を携え、暑苦しい鎧をきたオッサンたちで・・・どこかのＳＳで読んだような異世界感が漂っていた。幻覚を抹殺するために急いで扉を探したが既に扉はなく・・・やつてきました、異世界冒険譚・・・というか今回僕は巻き込まれただけのような気がするんだが？しかもこんな不思議な体験なんて絶対に・・・

案の定隣の馬鹿が興奮してました。鈴木陽子、我が学園が誇る才女。才色兼備、才学非凡、眉目秀麗、頭脳明晰、優美高妙と褒めだしたらキリがない完璧超人。しかし・・・こいつは異世界を夢見る変態女なのである。本人は隠しているつもりかもしれないが学校内での公然の秘密となつてゐる。

別に異世界が好きだからこいつを嫌っているわけではないことを一応先に伝えておこう。こいつを嫌いな理由については後々教えていくつもりだ。蛇足ではあるが巫女さんはああ見えても（素敵ロリータボディー）1200歳以上の不老体質らしく（原因は教えてはくれなかつた）正気の戻つた際に合法ロリータ（あまりこの言い方は好きじゃない）である巫女さんにプロポーズしてしまつたのは言うまでもないことであろう。10年前会つたのも彼女ではあると思

うが、余計なことを聞いたら更に面倒なことになりそうな上に、若干トライアウスマが出ていたのでそれを伝える気にはならなかつた。

でふつぶつと現実逃避している間に何だかわからないうちにあれよあれよとあつという間に王様の前まで連れていかれて、知らない間にテンプレの如く魔王退治を頼まれ、馬鹿が勝手に承諾しました。後で聞いた話では100年に一度現れる魔王を異世界の勇者を召喚することによつて退治しているらしい。どちらかと言えば形骸化した儀式のようなものらしいのだが、魔王が現れるということは魔族の動きも活発になるので実際には笑えないらしいが……

他者の都合で呼び出され使役することに苛立ちを感じえないが、魔王倒すことにはこの国及び周辺の人々は滅びてしまうし、何より僕たちが帰るには魔王を倒さないといけないとのこと……そんな話を聞いて正義感に満ち溢れた馬鹿が断るわけもなく……やるしかないようだ。ハツキリ言つて胡散臭かつたが、現実逃避していたのでその場で突つ込めなかつたことが今になつて悔やまる。

その後、連れて行かれた謎の部屋にて勇者として備わつた力を確認する作業を行い（何をしていたのかはさつぱり分からなかつた）、エンドレスで興奮している変態には『ドクターハッククリローダー 竜魂装填』というなんとも14歳病ちくな名前を持つ能力を所持していることが確認された。どんな力かと言われば1匹で国を滅ぼすことの出来る力を持つたドラゴンの力をその身に宿すことができること……なんとまあ反則くさい能力だなと呆れつゝも自分の能力に期待していると……何も宿つていなかつたらしい。あまりの虚しさに打ちひしがれながらも隣で易々と剣をへし折つている変態を睨みつける。これで確信した、僕は勇者として呼び出されてはいない！…変態の異世界移動に巻き込まれただけだといつうことだ

いりして僕、岡本忠勝の異世界冒険が始まってしまったのである。
…………そして、始まりもあれば終わりもあるわけで……

ハツキリ言おう。

僕たちは嵌められていたのだ。

勇者を呼び出す儀式とは100年経ち肉体の朽ち始めた魂だけの存在である魔王に新たなる強靭な勇者の肉体を与えるための儀式。要は王と魔王はグルであった。

魔王を倒したところで帰れるわけもない、魔王の力は自分を殺した人物を乗っ取りその力ごと奪うという最低最悪の力だから……
……帰れるわけがないのだ。つまりは種を撒き、水を与え成長したところを刈り取るといったところであろう。

僕たちを呼び出した巫女さんらしき女の子は魔王と王がグルなのはおかしくないという事実すら知らなかつたようだが。どうやらその世代ごとの王が念入りに情報を隠蔽していたそうだ。

王が魔王に勇者の肉体を捧げることにより国の安定を、魔王は王に新たな肉体をもらうことにより永遠の命を・・・・・そんな契約が結ばれていたのだ。

別に為政者としては何ら間違えてはいない、何かを犠牲にして国を守るのは王として当たり前のことなのだから僕に王を責める気はない。

しかし・・・・・僕は奴らを赦すわけにはいかなかつた。

異世界に来て2年、僕は大つ嫌いだつた女に恋をして、大好きな女をこの手で殺めることになつて、愛した女に呪われたのだから・・・

嫌いだつたんじゃないのかつて? しようがないだろ、惚れちまつたんだから、愛とか友情とかは大して好きじゃないけど恋とかそういうのつてそういうもんだろ? 愛憎なんて言つぐらいなんだから愛と嫌悪は簡単にひっくり返つちまうんだ。ホントどうして好きになつたんでしょうかね? 僕のストライクゾーンとはかけ離れた存在なのに、横に寝ているときには度年齢退行薬を飲ませようと思つたか・・・ 数えきれないぜ(キリッ)。冗談はともかく彼女を愛していた。

だから赦せなかつた。

彼女の艶やかな黒髪が忘れられなかつた・・・あの綺麗な髪を撫でるのが好きだつた。

彼女の鈴を転がしたような声が忘れられなかつた・・・名前を呼ばれる度に抱きしめたくなつた。

彼女の肩まで伸ばした髪が忘れられなかつた・・・彼女が動く度に揺れるのが愛らしかつた。

彼女の吸い込まれるような黒い瞳が忘れられなかつた・・・あの強い意志を宿した瞳が誇らしかつた。

彼女の吊り目がちな眼差しが忘れられなかつた・・・褒められる
と気にしてゐる姿が堪らなかつた。

彼女のあでやかなまま真っ白い肌が忘れられなかつた・・・身体を
合わせた時のあの温もりが戀しかつた。

彼女の全てが忘れられなかつた・・・ちょっとした仕草や好きなものや嫌いなもの、よくやつてしまつ癖や大事にしていたもの。忘れられるわけがなかつた。

何より彼女をこの手で殺し死へしたあの感覚を忘れる事は出来ない・・・忘れる気など最初からないけれど

殺して殺しつくす。

彼女が死んだ、いや彼女を殺したその日、僕はテミス王を殺した。人殺しが嫌いだつたはずの僕がなんの躊躇いもなしに。僕に殺される前に王は無様に命乞うすらすることなく、自ら僕に命を差し出したと言つた。

「余は王である」と・・・故に殺した。自らの怒り、自分勝手な理由によつて。いつかこうなると分かつていたであろう、国を守る王のために

けれど指を引きちぎり、四肢を砕き、腹を貫き、頭蓋を砕いて尚我が怒りは消えることはない。

怒りにまかせて国を滅ぼそうとした。あるはずのなかつたようやく目覚めた能力の全てを使って・・・しかし、出来るはずがなかつた。彼女が好きだと言つたこの国を壊すことは出来なかつた。彼女はこの風景が好きだと言つていたのだから、彼女の好きだという場所を侵すことなど出来る訳もなく

これ以上壊すことなど出来る訳もなかつた。

王を殺害し、賞金首となりテミス王国を追われた僕は逃げつづけた。クソッタrena能力のせいで軽く人間を辞めてしまつてるので、幸い迫りくる追っ手やら賞金狙いの傭兵に恐怖することなどなく・・・隠居しました。

いやだつて逃げるのにも飽きたし、どうせ死ないし一つの拠点にどつしり構えつつも隠れているのが僕らしいと思ったんだけど、間違つてないよな？

でそんな僕を置いておいて、混乱したのはテミス王国の重鎮たち。彼らは国王と魔王の契約を知っていたせいか、魔王が殺され国王までも殺されたせいか大慌て何せ魔王がいなくなつてしまつたせいで契約もうやむやになり、国を守る力を失つたわけだからな。

重鎮たちはその事態を收拾するためにすぐさま子供を王様に仕立てあげ、王様を騙して国を守る力を呼び出すことにした・・・・・最も簡単に手に入つてとてもなく反則じみた力を

早い話が勇者召喚の儀式で、あの儀式で異世界から呼び出せるものは一つしかなく、重鎮たちは頭を使い昔勇者から聞いた話を思い出し、あるものまるごと呼び出そうと画策した。

・・・・・重鎮たちが勇者から聞いた話とは『若者を集め勉学を教える建物がある』ということ。そう結果として学校一つをまるごと異世界に呼び出したのである。

確かに一つは一つ、儀式のルールには反していない。内包されているものはカウントされないのである。そして、最悪なことに呼び出された日はあちらの世界において平日の昼間。つまり生徒、教師、全てを含め全651名が異世界へと召喚されたのである。全員が能力を伴つて

勇者に伴う能力について説明すると、まず初めにあちらからこちらの世界に来たものは必ず能力を所持している。

何故かと言うとこちらの世界はあちらの世界に比べて一次元上の世界にあり、低次元世界のものが高次元世界のものに接触することが出来ないという根本的なルールがある限り、我々がこちらの世界のものに触れることは出来ないのだ。

しかし、儀式によつて世界を渡された瞬間にこちらの世界に存在するために本来あるはずのない一次元が加えられるのである。それが勇者に与えられた《能力》の正体なのである。能力があるそのかわりにあちらの世界になくて、こちらの世界にあるのが《魔法》という次元なので残念なことに我々は《魔法》を使えることが出来ないのだ。

まあ何人かは《能力》という形で《魔法》を得ていたが・・・

で呼び出されたのは穂村高校という共学の学校の人達、高校生といつ多感な時期に過度の力を得た彼らは簡単に暴走。同じように異世界に来た先生を虐殺、女の子を強姦、気に入らない奴を殺害、国民を奴隸にしたりとやりたい放題の悪行三昧。

重鎮たちの予想を遥かに裏切り、國に宿る最低最悪の謎となる。もちろん能力を得ても真面目な青年たちやら何やらは居たので、結果として悪行を奮つっていた生徒たちと対立。テニス王国に内乱が発生してしまうのである。

「この時僕は魔王が治めていた魔族のいる国のある山にて隠居中で何故か魔族たちから山神様と敬われ、働くだけで生きていけるという素晴らしい一ートライフ（余生）をエンジョイしていたのだが、ある日唐突に・・・・・邪魔が入ってきた。

「どうか魔王としてこの国を御治めくださいませ」

魔王が治めていた国の宰相であつた魔族の一人であるグロリア・ゲイルハーツである。最初は呪いのせいで退行化したショタボディーのせいでナメられているのかと思っていたが、眞面目に彼の話を聞いている内に違うと分かりとりあえずさらに耳を傾けてみる。

彼は魔王の側近であつたにも関わらず、人間を憎みもせずにただ実直に国へと仕えた忠臣であり、有能な魔族であった。

そんな彼が魔王を倒した責任と称して、僕に魔王を務めろと言つてきたのである。正直な話、僕は魔族とか人間とか区別する気もなくかなりどちらが滅んでもどうでもよかつたのだが、人間に虐げられ泣き叫ぶ、人と全く変わらない魔族の姿を見させられイラつきしょうがなく魔王となつた。

実際のところグロリア・ゲイルハーツの僕ですら利用して己の大切なものを護るという強欲さが気に入つたというのもあるが・・・

でそんなこんなでせつかく新しい魔王となつたので今までの既存の制度を全て廃して、新しい法律を設けて、僕が王であることが気に入らないものは国から追い出し、新たな国を立ち上げたのだ。

それがアンリ王国。人間であろうと魔族であろうと種族の関係なしに受け入れる国を作った。

もちろん受け入れられないという人達には好きにしてもらいたい
まあ大半の魔族が人間との戦いに疲れ、これ以上を争うこと嫌い
下についてくれたのだが反対する人はいるもので・・・追い出され
た重鎮たちと共に新しい国を建国、マルス王国の建国と相成り、マ
ルス王国は基本的に魔族至上主義者たちの集まりで人間に對しての
扱いが酷く、種族の差別が激しかつたせいか国民が嫌悪し集まつた
数は少なかつたものの魔族の中でも力を持つた魔人たちの大半が集
まつたので、戦力としてはかなり強大で、周辺の国を力で征服し自
らの領土と支配し好き勝手に榨取を続いている。

新しく魔王となり賞金首の名前で王になるのは拙いので名前を捨て（まだ技術が発達していないので僕の顔写真などはないので）、新しい名前となつた僕の一一番最初の命令はマルス王国との戦争だつた。すぐさま國中から戦いたいと希望した兵士が集められ、戦支度も整い。こうして僕自身も前線へと向かうほど激しい戦いとなつた大分裂戦争と言われる大陸中を巻き込んだ戦いが始まつたのである

まあ一応気にはなつてゐると思うので戦争の結果だけ言えば、テミス王国にいたアホ勇者たちは大半が戦死、それによつて勢いを失つたテミス王国は呆氣なく撤退、アンリ王国との停戦協定を表明する。一方良心ある勇者たちは、戦争中にテミス王国のやり方にはついていけないと国外逃走、アンリ王国へと亡命後不可侵条約を結びとある村にてひつそりと生活中。マルス王国は戦争をけしかけてきた魔族の死亡によりこれまた呆氣なく撤退、テミス王国と同じように停戦協定を表明し、これにより大分裂戦争は終わりを告げ、このオーデ大陸に平和が訪れたのである。

戦争も終わり、クソッタレな能力により不老不死になつてしまつた僕が今現在何をしているかというと

「…………」

「まだ5分も経つてませんよ? イライラするの早すぎですよ
僕が欲しい時に来なければ無価値も同然……明日埋め立てよう
! ! !」

「釣れねえ」

「まだ5分も経つてませんよ? イライラするの早すぎですよ
僕が欲しい時に来なければ無価値も同然……明日埋め立てよう
! ! !」

「…………勘弁してください」

白髪の爺さんと呑気に釣りなんかしちゃつてます。ちなみにこの1200年で磨耗して性格が変わったようです、自分の性格を覚えてないんではつきりしたことはいえないけど、優しさ? ナーツレ? おいしいの? つてぐらいには変わったはず。当たり前でしょ。いつまでもヘタレのままじゃ王様なんか務まらねえもん……いろいろあつたからなあ~(遠い目)。

あの時は王でいなければならなかつた。心を殺し10人を殺し100人を殺し1000人を殺し、自分を殺し10000人を助け1

00000人を助け1000000人を助け、殺した人数の何倍も助けて、進むためには犠牲を厭わず、栄えるためには犠牲を厭わず、守るために犠牲を厭わず。狂ったように殺し続けて、その屍の上に君臨した。それで守れるものがあると信じて・・・まあそんなこんなで戦争も終わったので舞おうを辞めて、以前と同じように神様扱いの隠居生活を楽しんでるわけですよ。まあ以前とは一つ変わったことがあると言えばあるけどな。

「で國にお戻りになつていただけませんか？」

そうアンリ王國から國に戻るよう要請され続けているのだ。わざわざ勧誘専用の職まで作つて・・・いやはや難儀なものである。

「い・や・だ！」

当然の「いとく面倒なので拒否してはいるが、向こうも分かつた上でお役目上仕方なく聞いているので適当に聞き流したはいるが多少うざつたちは変わりない。正直半ば形骸的な役職とかしているので基本的には本気で勧誘したりはせず爺さんも僕と同じようにスローライフを楽しんでる。もうこれ以上汚らしい爺さんと腹の探り合いなんかしたくないらしい。その件については果てしなく同意せざるを得ないが・・・」

「さあて、なんも釣れねえから帰るひげ」

「そりですな」

グダグダしている間に一時間程経つたのだが、一向に釣果がないので完全に心が萎えたので帰ることにした。僕の性格からして一時

間もまたたのはある意味奇跡と言えよう、そんなことを考えて自分の短気な性格を嘲笑いながら川岸に沿つて移動する。

「あつ」

ぐだらないことを考えていたせいか、移動している最中に足の下にあつた石がズレてしまいバランスを崩しこけた。視点が横になる中、目を閉じて能力で石を粉碎するか迷つたが面倒なのでこけた時にくる衝撃だけ殺すことにして、しかしこうに来るはずのダメージがやってこない。不審に思いながらも走馬灯かななどと軽口を叩きながら下にあるはずの地面に触ろうと手を伸ばした瞬間

「ようこそ、いらっしゃいませ。665番田の・・・あら?三人ですか?おかしいですね?まあこれもアンペラトリス様のお導きなのでしょうか。ようこそミス王国へ。665番田と666番田と667番田の二人の勇者様」

再び地獄(見覚えのあるトラウマ満載なゲームに出てきそうな神殿らしき場所に来ていた)始まった。僕の一ートライフが終わりを告げた。

思わず叫んでしまったのは間違いなんかじゃない。

≈ to be continue ≈

■おもてなしロゴ（後書き）

お楽しみいただけたでしょうか？まだ能力すらでていませんがお楽しみいただけたら幸いです。

では会えたらまた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1337p/>

13番目と666番目な死にたがりのニートで勇者な魔王
2010年11月27日17時43分発行